長崎高教組新聞

発行
〒850-0013 長崎市中川2丁目2番5号
長崎高教組会館
長崎県高等学校教職員組合
☎ (095)-827-5882
FAX (095)-826-2976
編集責任者 小田 誠
購読料一部10円
組合員は組合費に含む
メールアドレス
naga-kks@fsinet.or.jp

長崎高教組 第218回 定期中央委員会

ゆいまーる参加の青年教職員から　沖縄の現状　憲法を守りいかす闘い　そして全国の若者の生き生きとした姿が　報告され　活気に満ち溢れ　元気と勇気をもらった中央委員会

県内各地から44人の中央委員が参加

長崎高教組は、1月28日(土)、諫早市高城会館で第218回定期大会を開催しました。

県内各地から、各分会・支部の中央委員43人、特別中央委員1人、本部6人が参加しました。

執行副委員長により開会が宣言されたのち、執行委員長から三点にまとめて挨拶がありました。第一は、「長崎高教組組織建設3か年（2015～17年度）計画」の二年目を総括し、完成年度に向けて奮闘の期待。第二は、「ズッコケ三人組」の作者、那須正幹さんの「戦後は本当に続くのか、戦前になりはしないか」と安保法制（戦争法）への危惧の一文を紹介し、「教え子を再び戦場に送らない」という誓いの再確認。第三は、「ポスト・トゥルース」という語を紹介し、トランプ政権の選挙手法、政治手法の危険性、安倍政権の問題点を指摘しました。

その後、本部執行部から、第1号議案－春闘及び当面の運動方針、第2号議案－暫定予算、第3号議案－本部役員選挙公示、第4号議案－専従役員損失補償の4つの議案が提案され。質疑・応答まで行って、午前の日程を終了しました。

安全運転講習＆全教自動車保険学習会

昼食休憩の時間に、全教自動車保険の引受保険会社である東京海上日動火災保険から「安全運転講習会」がありました。ドライブレコーダーの映像で実際の運転の状況を目の当たりにした、慣れによる危険な運転に気付かされました。

午後の冒頭は、全教自動車保険センター事務局長の平尾さんを講師とした全教自動車保険についての学習会が行われました。学習会のポイントは別掲しています。

その後、討論開始前に、恒例となった福山雅治の「くすのき」を佐世保商業分会の井野口中央委員のウクレレ伴奏で合唱し、気持ちを一つにしました。

当面の運動方針に関する討論

運動方針の第1号議案を中心とする討論では、「組織拡大・強化」、「生活と権利、平和・民主主義」、「民主教育、教育条件整備」の3分野に分け、延べ21人から発言がありました最後に本部見解を述べ、討論を終了し、議案の採決が行われ、反対、保留なしで、本部提案の4つ議案がすべて採決されました。

以下、第1号議案に関する討論の概要を紹介します。

A 組織拡大・強化のとりくみ

西陵（支部長）

錦戸中央委員が、二人が定年退職の予定。なんとか後継者を育てていきたい。

また、労金の会議で会う他の単組では若手の活動が目立つ。新採用者が県教研に参加したが、もっと若手教職員の拡大をすすめていきたい。若い先生方は悩みを抱えている。智恵を出し合いましょう。

佐世保中央夜間

濱本中央委員

今年度、二人拡大を実現した。事務職の方とは諸納金、給食費などの未納の生徒への家庭訪問などでじっくり話す時間があった。

20代後半の臨採の先生は、支部の組合費補助をきっかけにし、定通部学習集会やゆいまーるに参加し刺激を受けてきている。「TANE in 富山」にも参加予定である。若い人が若い人に声をかけることが効果が上がる。

佐世保商業

井野口中央委員

朝日新聞の「折々の言葉」を授業で紹介したりすることがある。12月と1月の「何時間話したかより、何回やったかという回数の方が大切」であるという言葉と「人生は挑まなければ、応えてくれない」という言葉を見て、高教組の元委員長の平井先生が言っていたことを思い出した。この二つの言葉は組織拡大をとりくむ上で、重要な示唆を与えてくれる。とにかく、声かけをしていこう。

壱岐商業

中鋪中央委員

ゆいまーるのフィールドワークで普天間基地を見た。オスプレイの不時着事故のあとで、オスプレイは飛んでいなかった。それに対してガイドさんの一言、「もっと無くなればいいのに。」が心に残り、沖縄の苦しみが伝わってきた。

1000人規模の交流会は、こんなにたくさんの仲間がいると感動した。声かけをしていきたい。

長崎工業

砂田特別中央委員

ゆいまーるの講演やディスカッションで、報道されていない沖縄の現状を知ることができ、また全国の若者と交流することができ、大いに勉強になった。

フィールドワーク

で、対馬丸記念館や南風原(はえばる)陸軍病院跡を見学し、当時の状況を学ぶことができた。平和学習では、原爆に加えて沖縄問題を扱うようにしたい。

虹の原特支対馬分教室

（支部長）田中中央委員

学生時代沖縄で学んだものとしてゆいまーるに参加できて本当によかった。団長ということできつい部分もあったが、若い先生方と交流できてよかった。

首里城や高江のヘリパッドなど見学したが、フィールドワークの途中、砂浜でのんびりしている時に、平和の尊さを感じた。日常が壊される戦争の怖さを改めて感じた。

1000人の交流会で「仲間」を感じた。

全教自動車保険学習会より

教職員の身分を守る全教教自動車保険

長崎県の県立学校の教職員の通勤手当受給者の約85%が自動車又はバイクで通勤しています。教職員は長時間・過密労働で「過労運転」の危険にさらされています。

重大事故を起こし禁固刑（執行猶予付でも）以上になると教員免許状が失効し、失職となると教育職員免許法5条に規定されています。

交通事故の加害者には、民事責任（損害賠償金の支払い）と刑事責任（危険運転致死傷罪<負傷の場合15年以下、死亡1年～20年の懲役>、過失運転致死傷罪<7年以下の懲役又は禁固、100万円以下の罰金>が問われます。

損保会社の事故対応は、民事責任についてのみ対応し、刑事責任には触れないのが一般的ですが、全教自動車保険は、民事責任だけではなく、刑事責任も見据えて対応します。全教共済保険は、教職員の「身分を守る」運動です。全教自動車保険は、交通事故によって教職員の身分が失われることがないように、25年余の実績をもつ「全教方式」で事故対応をおこなっています。

お問い合わせは、高教組本部へ。

第12回　子どもと教育を考えるつどい

「奨学金」が若者を苦しめている

今や大学生の2人に1人は奨学金利用者と言われています。その背景には、格差や貧困の拡大で親の経済的援助を受けられない学生の急増と、学費の高騰があります。国立大学の年間授業料は、1971年が1万2千円だったのに対し、昨年度は約54万円、初年度納付金は80万円を超えます。私立大学はそれより大きな負担を強いられます。多くの学生は奨学金を借り、生活のためにアルバイト（ブラックなアルバイトが多い）に明け暮れ、そして数百万円の借金（奨学金）を抱えて卒業するのです。

しかし、今は3人に1人は非正規雇用という時代です。生活するのさえ苦しく、奨学金を返したくても返せない人が増えています。

一方、2004年に日本育英会から変わった日本学生支援機構の奨学金制度は、奨学金という名のローン＝金融事業になってしまいました。返済が3ヶ月滞ると金融機関の「ブラックリスト」に入ります。4ヶ月滞納で「サービサー」と呼ばれる債権回収会社の回収が始まり、9ヶ月で裁判所を通じた支払督促がきます。中高年の人の記憶にある、育英会時代ののどかな奨学金とは別物なのです。

実際に奨学金の返済に困っている方や関係者は、返済しなくてはいけないという責任感の強い人が多く、そのために就職した会社の給料ではまかなえずダブルワーク、トリプルワークで働く人がいます。「自分が返さないと次の若者が借りられなくなる」と過酷な労働の会社で働き続け、過労のため事故死してしまった人がいます。

この国は教育にお金を出さず、お金がないと学校に行けない（受益者負担）という社会をつくっています。若者たちは奨学金というローンを借りたくて借りているのではありません。そこに追い討ちをかけるがごとく、借りたものを返すのは当たり前というネット上での攻撃。

3人に1人が非正規雇用という今の社会の中で、就職に失敗する、リストラされる、あるいは病気になって収入が得られなくなる、そして自己破産。誰にでも起こりうることだと思います。

奨学金の問題に詳しい、坂本次男全教中央執行委員を迎えて、基調報告をうけ、交流を行います。高校生や大学生のいる教職員、奨学金担当の教職員、奨学金を返済している教職員の方々、集まって、奨学金について考え、意見を交換しましょう。

第12回　子どもと教育を考えるつどい

日　時
3月5日（日）
13:00　受付
13:30　開会
16:00　閉会

会　場
教育文化会館4F
長崎市筑後町2-1
☎ 095-822-5196

日　程
① 開会あいさつ 13:30～
② 基調報告 13:40～ 坂本次男さん
③ フリートーク＆交流 14:50～
④ 閉会あいさつ 15:50～

問い合わせ先
高教組(095-827-5882)

「ゆいまーる」報告の第3弾をお届けします。

長崎高教組青年部としての思い

○「初めての沖縄！海！」と心の中で叫びながらのゆいまーる参加でした。海は想像以上に綺麗でしたが、さすがに冬だったので飛び込めなかったのが唯一の心残りです。

これまでは長崎高教組青年部の一員として細々と全国集会や中四九ブロック集会に参加させて頂いていましたが、今回のゆいまーるでは堂々と「長崎」として団体で行動できるほどの数の先生方と一緒に、首里城に行ったり、懇親会を開いたりできたことが何より嬉しい体験でした。これからもこのような機会を活かして、さらに多くの長崎県の先生方と繋がっていけたら、と思います。

「ゆいまーる長崎高教組」で考えた

○那覇市内の居酒屋で、今回の旅の「同志」の先生方と食べ、飲み、大いに語りました（酒が入っていたので、語った内容はほとんど忘れてしまいました）。居酒屋の従業員の中に、あまり見慣れない外国人がいたので、どこの国から来たのか聞いてみたら、なんとネパール人でした（この時だけでなく、二日目にまたみんなで飲んだ居酒屋の従業員、滞在したホテルの食堂のスタッフや国際通りの土産物屋の売り子さんなど、いたるところでインド系の顔立ちの人が目立ちました）。

近年インドが急激な経済成長を遂げていることはよく知られていますが、インド国内だけでなく、その周辺国も、なんらかの影響を受けているのでしょう。彼らは、そうした社会の激変の中で押し出された人々なのでしょうか（データの裏付けも確証もありません。あくまでも私の個人的見聞に基づいた推測です）。そう遠くない将来、わが国の若年労働者の不足を補うためにアジア各地から移民労働者を受け入れることになる前兆なのかもしれません。

はからずも日本の南の「辺境」の地で、南アジアの「辺境」の人々と出会えたわけですが、南の島でリゾート気分に浸っている私たちにビールジョッキをせっせと運ぶネパール人の姿に、一抹の後ろめたさと、現代の世界を取り巻く経済のいびつさを感じました。

三上さん講演・トーク

○講演会で沖縄の現状について学びました。『標的の村』や『戦場ぬ止み』などの映画で沖縄の基地問題や人権問題を伝えてこられた三上智恵さん本人から、沖縄が抱える問題や具体的な沖縄の実際を分かりやすく話して頂きました。これまで何も知らなかった自分を恥じるとともに、沖縄の人々が抱える、騒音や土地問題、そして命に関わる墜落事故や米兵犯罪などの問題を初めて真剣に考えました。「安全に生きる」という最低限の生活さえ脅かされるような沖縄の現状に対して、もっと多くの人がその状況を知るべきだと強く思いました。

○全国から到着した教職員でごった返していたホールで流れていたのが、沖縄で活躍するミュージシャンである神谷千尋の代表曲「空よ海よ花よ太陽よ」だったのは、個人的にはとてもうれしかったです（実は私は彼女のCDを3枚も持っているのです）。ちなみに、誰がどんな理由で選曲したのかはわかりませんが、「島の祈りとどけ　平和の願いとどけ」という歌詞で締めくくられるこの曲を『未来プロジェクト』のオープニングに持ってきたあたりに、今回の企画に対する運営スタッフの方々の並々ならぬ想いを感じました。

沖縄の基地問題を扱ったドキュメンタリー映画の監督・三上智恵さんの講演は、本土にいてはピンとこない米軍基地問題の本質をえぐり出すものでした。特に「沖縄のマスコミは偏った報道ばかりして中立性に欠ける」と本土の人からよく言われます。でも、米軍基地のようなイヤなものを何十年も押し付けられてきて、中立的でいられる方がおかしいでしょう？」という彼女の言葉には説得力がありました。最近、「教育の中立性」という言い方で教育現場を締め付けようとする傾向が顕著になってきていますが、私たちは「中立」というもっともらしい言葉で偽装された、批判を封じ込めようとする大きな存在に気付かないといけないのかもしれません。

フィールドワーク

○最も強く印象に残っているのが、「沖縄戦は沖縄に住む一人一人の戦争である」という言葉です。例えば沖縄戦が始まってすぐさま米国の捕虜となり5月には衣食住の確保された生活に戻れた人と、第二次世界大戦が終わったことも知らずに10月まで極限状態の中逃げ回りながら生存した人と、個人の戦争体験には非常に大きな差が生まれています。日本唯一の地上戦が繰り広げられたがために、終戦を実感する時期もその状況も個人によって様々で、沖縄戦というものは学べば学ぶほど新しい事実や印象を受けるものであることを感じました。また、実際に入ることができた糸数アブチラガマ（自然洞窟）では、日の光が一切入らない暗闇の中で多くの人々が負傷したまま放り出されて水を求めて亡くなっていったことを想像し、胸が痛くなりました。洞窟の中では絶えず水滴の音が響いているのにもかかわらず、傷ついた身体では水たまりを探す体力さえなかったと聞かされ、その無念さが伝わってきました。たった一時間の体験でしたが、ガマから出た時の太陽の照らす地上の美しさを私はきっと忘れないと思います。「死ぬなら太陽の下で。」と願い続けて生存した方の言葉が、今でも強く胸に残っています。